Awa-Odori as a Metonymy of Tokushima, Japan

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/1553

金沢大学文学部地理学報告，No.10，2002

徳島の阿波踊り／阿波踊りの徳島

Awa-Odori as a Metonymy of Tokusima, Japan

立岡　裕士
TATUOKA, Yuuzi

I　はじめに

場所のイメージは，他の知識と同様に，社会的な生産・消費の過程をいわば螺旋的に積み重ねていくことで形成される．そうしたイメージの「語り」（旅行記・旅行案内書であれ，もっと一般的な形においてであれ）について検討するにあたっては，この生産・消費の循環過程を，その場所に住む人間による内側からのイメージと外部の人間による外からのイメージとの交錯を含め，何をどのような視線で語るか，といった点に考慮する必要がある（竹内（1993: 204-240）がイタリアや日本を巡る案内書の具体的な分析で示唆したように）．その中でも語りの対象（焦点）と視線とがはらむ問題は従来必ずしも十分に取り上げられていないのではなかろうか．焦点と視線とは，密接に結びついてはいても決して不可分の関係にあるわけではない．同じ事物を違った立場から眺めることは可能である（浮田・伏見（1999）は南河内の名所の記し方の変化を取り上げることでその具体例を示しているが，この点については意識的とは言いがたい）．ある土地を，そこに見られる事物で象徴的にイメージ化することは一種の換喩であり，換喩に含まれる揺らぎ（多義性）のゆえに多くの人に容易に受容される可能性がある．そうした意味では，視線に先行するとは言えないまでも視線から半ば独立したものとしての焦点について，それがいかにして焦点となりえたかを検討する必要があると思われる．

徳島（県）[1]の表象としての阿波踊りは，内からも外からも焦点として一致している換喩的イメージの事例である．筆者は上記のような問題意識のもとで，そうしたアイデンティティの形成される過程について明らかにしたいと考えており，本稿はその作業の第1報である．「阿波踊り」を換喩的なものとして捉える以上，その内包・外延について論ずる必要は本来ない．しかし，「阿波踊り」自体が歴史的に成立・展開してきたものであるため，「徳島＝阿波踊り」という換喩が成立する過程を考えるに先だち，まず「阿波踊り」の成立・展開について簡単に述べておきたい．そこで第II章では阿波踊りに関する既往の文献を利用して，まず阿波踊りの概要について説明し，ついで第III章で県内外の新聞・旅行書で阿波踊りがいつから取り上げられているかについて報告する．

II　「阿波踊り」の広がり

1　「阿波踊り」の成立

「阿波踊り」という名称の使用は阿波踊りを巡る語りの一部をなしている．その意味でこれは次章で扱うべき問題であるが，行論の都合上ここで触れておく．

「阿波踊（り）」という名称が成立したのは明治末～大正初年と考えられている．すなわち石川（1999: 49）によれば，新聞紙上での「阿波踊」の初見は1909年11月8日付の大阪朝日新聞の阿波付録であり，この時期の県内紙では「阿波踊」と「徳島踊」という両様の呼び方が見られるが「徳島踊」は1914年以降は使われていないという．新聞紙上のみならず，画題にも「阿波踊」が用いられていることから大正初年にはすでにかなり一般的だったようである（真貝 1999）．さらに昭和にはいると徳島市・徳島商工会議所が観光客誘致のために「阿波踊り」の売り出しを図り（石川 1999:67），「阿波踊り」という呼称はいわば公的にも認められたことになる．「阿波踊り」使用以前は，「阿波（または徳島）の盆踊り」が使われていた．「阿波踊り」はその略称であるが，その一方で，当初は，盆以外の機会（各種祝賀行事）に行われる踊りを指すために，いわば「阿波の盆踊り」と差別化するための

呼称であったという（石川 1999: 49）．盆踊りを含めて「阿波踊り」に総括することが一般化するのは戦後のことのようである（松本 1980:32; 石川 1999:67）．

その他に「阿呆踊り」・「気違い（気狂い）踊り」・「ゾメキ踊り」などの呼び方も使われ，さらに県内では「イケソラ踊り」と呼んでいるところもある（一宇村・半田町[2]）．「阿波踊り」はそうした通俗的な名称に対する雅称としての意味も込められていたのではなかろうか．なお後述するように「阿波踊り」は盆や特別の行事以外にも宴席の結びにも踊られていた．そうした踊りは「よしこの踊り」・「お開きの踊り」と呼ばれていたという（松本 1982: 41）．

また，「阿波踊り」という名称は，外側からの命名であれ内側から対外的に発信したものであれ，外部との関係のなかで成立したように見える．しかしこれも後述するように，「阿波踊り」的踊りは元来徳島県下一円で踊られていたのではなく徳島市など市部に限られていた．とすれば，「阿波踊り」という名称の成立には，徳島県の「阿波踊り」化ないしは「阿波踊り」（＝徳島市の盆踊り）の「阿波」踊り化という対内的な側面もあるのではなかろうか．

2　「阿波踊り」という踊り

写真1は，現在徳島で行われている阿波踊りの光景を撮したものであり，徳島市観光課が一般の求めに応じて無料で貸与しているものの一つである．同課によればマスコミなどからの需要も毎年相当数あるという．もとより我々が目にする阿波踊りの光景はこれに限られないが，この写真は阿波踊りの一般的なイメージを描いているといえるであろう．写真に示されていないことを補足しつつ述べれば，「連」という集団を単位として隊伍を組み，そろいの浴衣で，左右それぞれ同じ方の手足を同時に前に出すという形式（日本舞踊でいう「ナンバ」）で行進式に踊り，伴奏楽器としては主として鉦・太鼓を用いる，というものである[3]．

これらは松本（1980: 47）が正調として説明しているものに近い．阿波踊りに正調というようなものはないという主張がある[4]．一方，歴史的には正調擁護が繰り返し主張されてもいる[5]．こうした正調意識は大正期から次第に顕著になっており，「阿波踊り」の公認（＝観光化）と密接に関係しているであろう．

現在の踊りはかつて「ぞめき」と呼ばれていたものである．昭和30年代まではそれに加えて「流し」と呼ばれる芸が盆踊りの一部を構成していた．さらに明治20年代までは「俄」と呼ばれるパフォーマンスも行われていた[6]．こうした「流し」や「俄」は本来的に見せるものである（さらに江戸期には風流踊りの系譜を引くと考えられる「組踊り」も盆踊りの一部として行われていた（徳島市史編さん室 1993））．このような

写真1　徳島市における阿波踊りの光景

芸態も考え合わせると，観光対象としての「阿波踊り」のみならずそれ以前の徳島の盆踊りがすでに見られるものとしての性格を持っていたと考えることができよう[7]．

3　踊りの時・場所

観光対象としての「阿波踊り」は現在は月遅れの盆（徳島市では8月12～15日）に行われている[8]．しかしすでに触れたように，「阿波踊り」が徳島の盆踊りであるということには二つの面で留保が必要である．すなわち，一つは「阿波踊り」は盆期間以外に（慶事の際に）も踊られるものであること，もう一つは「阿波踊り」は本来徳島市の盆踊りであって徳島県の盆踊りではなかったこと，である．

まず前者の点について説明するために近代における「阿波踊り」の催行状況を表1に示した[9]．日清・日露の戦勝その他「国家的慶事」を祝賀するために「阿波踊り」が催されることの意味は余りも明白である（その最高点は，昭和天皇の即位大典を奉祝するための阿波踊りに県民が強制参加させられた（松本 1982）ことであろう）．このような方向付けの原点はすでに明治初年にあるようである．すなわち，『名東県歴史』

表1 近代における「阿波踊り」略年表

年	踊りの開催		備　考
	盆	その他	
1868	○		
1869	○		
1870	庚午事変		
1871	○		
1872			
1873	?		
1874	?		
1875	○		
1876	○		
1877	○		
1878	○		
1879	○		
1880	○		
1881	○		
1882	○		
1883	○		
1884	○	【撫養で顕彰碑建立祝賀(10)】	
1885	○		
1886	○ コレラのため11月に解禁		
1887	○		
1888	○ 盛り上がらず		
1889	○ 盛り上がらず		
1890	○		
1891	○ 盛り上がらず		
1892			東京日々に中止報道
1893	○		
1894	日清戦争		
1895	コレラ	凱旋(5)	
1896	○ 盛り上がらず		
1897	伝染病の兆し		
1898	○		
1899	明確な理由なし		2月徳島鉄道開通
1900	○		

年	踊りの開催		備　考
	盆	その他	
1901	○		
1902	○		
1903	○ 盛り上がらず(以後2日間)		
1904	日露戦争	(旅順陥落には踊りの予定)	
1905	○	祝勝踊りしばしば	
1906	○		
1907	○ 出直しあり		
1908	○ 雨のため盛り上がらず	皇太子来県(4)	
1909	○	市制20周年(11)	11月8日付大阪朝日新聞阿波附録に「阿波踊」の名称初見. 9月1日付徳毎では「徳島踊り」の名称.
1910	○ 再び3日間		阿波踊りの写真が新聞に掲載.
1911	○		
1912	諒闇		
1913	○ この年のみ2日間		映画化
1914	世界大戦	[徳島鉄道延長(4)] 青島陥落(11)	4月の中止記事中に「徳島踊」・「阿波踊」混在. 11月の記事に「阿波踊」. 以後「徳島踊」は用いられず.
1915	○	即位(11)	広告媒体として初利用
1916	○	立太子(11)	8月の紀三井寺祭に盆踊り男女が招待される「阿波踊りが紀州へ」
1917	○	蓬庵祭(5)	
1918	米騒動	市制30周年(5)	
1919	○		
1920	○	戎神社落成(4)・国調宣伝(9)	
1921	○	皇太子帰国(9)	3月神戸市海港50年記念行事に招かれる. 5月に東京・大阪・神戸で10日間ずつ公演.
1922	○	忌部神社50年祭(5)・凱旋(6)	商業会議所がポスター作成
1923	○ 盛り上がらず		
1924	○ 盛り上がらず		
1925	○ 雨		
1926	○		徳毎が大阪放送局に「徳島盆踊選手」を派遣
1927	○ 盛り上がらず		同上. 様子を徳島公園で流す.
1928	○ 盛り上がらず	市制40周年(10)・即位(11)	商工会議所がポスター作成

年	踊りの開催		備　考
	盆	その他	
1929	○ 4日間		商工会議所が大々的に宣伝．県外客殺到．これ以後新聞も特集を組む．審査場設置．
1930	○	県庁落成(4)	
1931	○	撫養商工祭(5)	「徳島盆踊歌」レコード化
1932	○		徳島観光協会，見物席を設置．
1933	○ 3日間？	市庁落成(4)	徳島放送局開局．阿波踊りを全国に放送．
1934	○	皇太子誕生(2)・小松島港祭(5)	
1935	○		
1936	○	徳島市観光祭(4)	
1937	日中戦争		
1938	日中戦争		
1939	日中戦争		
1940	日中戦争		
1941	農村の盆踊りのみ許可		4月に東宝「阿波の踊り子」ロケ．9月にも慰問用映画撮影．
1942	○ 2日間		
1943	○ 2日間		
1944			
1945			
1946	○ 3日間		
1947	○	憲法施行(5)	

石川(1999)・三原(1976)によって作成
「盆」の欄の○はその年の盆に踊りが開催されたことを示す．そうでない場合は中止の理由を示す．
「その他」の欄の()内の数字は当該行事のあった月を示す

（手写本．徳島県立図書館蔵）の民俗の項には，「盂蘭盆会ニ当ル時ヲ以テ男女衹服治粧日夜道路ニ絃歌踏舞シ以テ楽ト為ス」盆踊りを1872年に禁止したにもかかわらずそれが十分に守られていないため1874年10月に再度これを厳申する一方，「紀元天長ノ二節ニ道路絃歌ヲ許シ歓楽ヲ緩ニ」したとある（文脈からしてこの「道路絃歌」は「阿波踊り」を含むものであろう）．しかしこれは「盆踊ノ如ク盛ナラズ」とも記されており，実際，三原（1976）・石川（1999）によれば紀元節・天長節に「阿波踊り」が行われたことはないようである．後述するように，そもそもマスコミや教育界など社会の主力的な言論は明治20年代までは阿波踊りを批判していた．明治初年には盆踊りを座敷芸として楽しむ習俗[10]が定着していたという（三好1999）が，こうした私的な宴会の余興と国家的慶祝行事における余興とを同一線上に結びつける権力側の企図は少なくとも当座は成功していなかったのであろう（表1から窺えるように，恐らくは日露戦争を契機として，明治末からこのような公的慶事における，しかし，徳島置市記念のようなローカルな行事[11]において「阿阿波踊り」が行われることは国家的慶事に際しての催行と同一視することはできるのか否か．筆者はこの点について結論を得ていない）[12]．

次に第2の留保点について述べる．「阿波踊り」は

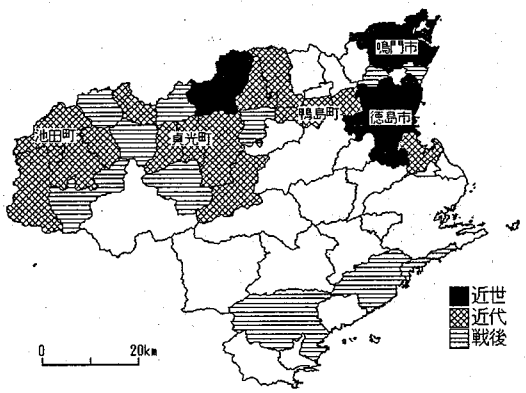

図1　「阿波踊り」の始まった時期

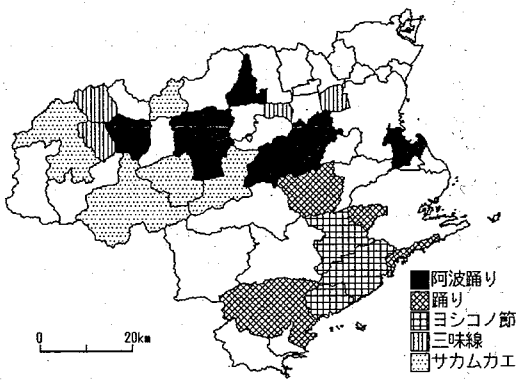

図2　ヒキコミ・サカムカエと「阿波踊り」

「徳島市を中心にした都市部の盆踊りであって，阿波全体からみると，特殊な一地域の盆踊りであった．しかし，現在では郡部にまでその勢力は及び，阿波踊りを踊るから，地域の盆踊りも踊る，という風潮が出はじめている」（檜 1982: 120）と言われる．しかし，現に阿波踊りはどの範囲で踊られているのかあるいは県内各地に阿波踊りが普及したのがいつ頃であるのかをまとめた文献はない．そこで各市町村史類[13]の記述をもとに，徳島県内における「阿波踊り」の普及範囲を，阿波踊りが始まった時期（近世，近代（明治・大正・昭和初期），戦後の3期）によって分類した（図1．本稿の関心からすれば「近代」として一括した時期の状況をより細かに示す必要があるが，資料の記述が曖昧なことが多いため，やむをえない）．本図に示された限りでは，恐らくは吉野川の水運に支えられて，徳島と経済的関係の深い地点から次第に普及していったのではないかと思われる（「阿波踊り」を支えていたのが藍商である（松本 1982）以上，これは当然の結果であろう）．「阿波踊り」は都市部の踊りであったとしても，必ずしも狭い地域に局限されたものではなく明治期にはかなり広い範域の町場でいわば点的に踊られていたのではないかと思われる（半田町や山城町へは明治前半に伝播した由が明記されている）．

一方，婚礼に関してはヒキコミないしはサカムカエという行為がある（ヒキコミは県の東部で，サカムカエは県の西部でそれぞれ行われているようである）．いずれも婚家に向かう花嫁を婿側が村境や門先まで出迎え，三味線などの鳴り物を奏でたりしながら迎え入れるものである．ただしサカムカエの場合必ずしも鳴り物入りで迎えるとは明記されていないので，図2では，（1）阿波踊りを踊ると明記されている場合，（2）単に「踊り」とだけ記されている場合，（3）踊りについては記されていないが，阿波踊りの囃子であるヨシコノ節を弾くと記されている場合，（4）単に三味線を奏でるとしか記されていない場合，（5）サカムカエはあるが踊りや演奏についての言及がない場合，の5種類に分けて示した．盆踊りとして「阿波踊り」を踊っているか否かが不明な県南部や県央の山間部にも，阿波踊りないしはヨシコノが及んでいる様子が窺える[14]．

III 阿波踊りに関する語り

1　県内

徳島県内で発行された新聞で「阿波踊り」がいかに報道されているかについては，前章でも繰り返し引用した三原（1976）・石川（1999）にまとめられている．それらによれば，各新聞とも盆踊りに関して詳しい記事を掲載する一方，明治30年代までは盆踊りを悪しき旧習として非難しており，それが好意的なものに変わるのは大正になってからであるという（石川 1999: 37-38, 44, 48）．しかしすでに1896年には「阿波名物の盆踊」という表現が使われている（三原 1976: 30）[15]．

単行本（表2）に関しては，1886年に刊行された『一笑三嘆　徳島繁盛記初編』（中野 1886: 55-60）が新聞同様あえて「盆踊」という項を立ててこれを非難している．しかし正統（伝統）的な地誌類はもとより『阿波国名勝記』のような案内記でも，「阿波踊り」は取り上げられていない．恐らくは1908年の『阿波名勝案

表2 戦前期に徳島県内で刊行された旅行案内書類における「阿波踊り」

刊年	書名	著者	
1879	阿波国地誌略	高知県徳島師範学校前川謙編	
1886	**一笑三嘆徳島繁盛記初編**	中野磯太郎	盆踊り批判
1886	阿波国名勝記	堤大介	
1891	阿波国文明小史上巻	広島秀太郎	
1896	阿波地誌	阿波国教育会	
1908	**阿波名勝案内**	石毛賢之助	
1913	**徳島案内**	井上 一	
1915	**阿波国最近文明史料**	神河庚蔵	
1923	**徳島県の名勝**		
1931	**阿波案内**		
1934	**徳島縣新名勝案内**	阿波名勝会	
1940	**阿波案内**	阿波保勝協会	

書名をゴチックで示したものが「阿波踊り」を取り上げている

内』が徳島の盆踊りを「全国各地の盆踊とは全たく其趣を異にし」た「一種異様の盆踊」（石毛 1916: 徳島市之部pp. 33-34）として評価した最初の図書であろう（徳島県教育委員会文化財課（1999）は管見の限りでも幾つかの遺漏があり完璧なものではないが，そこでも明治期に刊行された文献としては『阿波名勝案内』が挙げられているのみである）．そしてその後，30年ほどの間に出版された5種の観光案内書はいずれも「阿波踊り」を取り上げ，石毛同様の記述をしている．また観光案内ではないが『阿波国最近文明史料』（神河 1915）も「年中行事及風俗」の項において盆踊りについて記載している（このことは明治期に刊行された類似の題名を関した『阿波国文明小史　上巻』が盆踊りを取り上げていないことと対照的である）．その一方で，読売新聞社が1911年に全国読者からの投稿を募って編集した『お国自慢』（大島 1912）には徳島の記事として，「狐居ぬ国」・「祖谷山」・「をんな」の3本があるのみでそれらの中でも「阿波踊り」には全く触れられていない．もとよりこれは「九百余の項では青森のねぶたや広島の沼隈踊り・千葉県の盆踊りが取り上げられていることからすれば，徳島からは「阿波踊り」の報告がなかったと考えた方がよかろう．前章で述べたように「阿波踊り」という名称が大正初年にはすでに普及していたとしても，県民として阿波踊りにアイデンティティを感ずるようになるのは大正期以降ということであろうか．

2　県外

東京朝日新聞の復刻版について，1888年から1918年までの盆の期間（およびその他に「阿波踊り」の行われた期間）に前後各2日間を加えた期間の記事を調べたが，「阿波踊り」は全く報道されていなかった．特に1908年には皇太子（後の大正天皇）が来徳しその奉祝のために「阿波踊り」が行われている（三原 1976:51）が，東京朝日は，皇太子の動静を詳しく伝え奉祝行事についても報道していながら「阿波踊り」については全く言及していない．当時の東京朝日新聞は徳島県を含む西日本各地の水害記事などを掲載してはいるものの，関心の中心はやはり東日本にあったと思われる[16]．前述のように，すでに明治末には県外客が少なからず訪れているはずであるから，外部からの視線といっても関東と関西という場所の違いを無視することはできないであろう．

国会図書館の『蔵書目録　明治期　第2編歴史・地理』には「地理・地誌・紀行」の項に809の図書が挙げられている．その中には地名索引や府県名一覧あるいは伝統的な地誌や教科書が少なくない（特に『日本地誌略』とその関連書とは書名から明らかなものだけでも

150にのぼる）．また旅行案内書といえども『道中記』の多くは江戸時代以来の形式を踏襲した宿駅間の距離のみを記したものである．したがって，筆者の目的にかなう意味での旅行案内・旅行記でかつ徳島県を取り上げているのは多くても200程度ではないかと想像される．現在の所，50書が調査済みである．このうち県外で刊行され徳島県を扱っているのは表3に示した15種であり，徳島の盆踊りを取り上げているのは，『西部鉄道管理局線名勝遊覧案内』（1910年）と（正確には大正期のものであるが）『徳島線名勝案内』（1914年）のみであった．両書とも先に挙げた県内刊行の観光案内書と同様に「諸国に行ふものに比し其囃子及音頭共に頗る優美」（森永 1910:322）・「他国と其趣を異にせり」（藤本 1914:23）という形で盆踊りを紹介している．1916年には和歌山県商工会議所から「阿波踊り」遠征の要請があり，また1921年には神戸海港50周年祝賀行事に招かれる（石川 1999:54）など外からの着目が顕著になるのと同時期と言えよう．ちなみに1913年には「阿波踊り」が活動写真に収録されて県外で上映されている（石川 1999: 53; 三原 1976: 63）．

1811年に刊行された『阿波名所図会』はもとより明治中期までに刊行された名所案内が「阿波踊り」を取り上げていないのに対し，明治末に県内外でそれが着目されるようになった背景の一つは，日本における新しい国土観・風景観（ひいては名所・名勝観）の成立が考えられる．そうした変化には鉄道建設も預かっている（五井 2000a, b）．ただし「阿波踊り」に関し

表3 明治期に徳島県外で刊行された旅行案内類における「阿波踊り」

刊年	書名	著者	
1888	大八洲游記	青山延寿	
1893-	日本名勝地誌 巻8	野崎左文・藤本藤蔭	
1896	日本漫遊案内	松本謙堂	
1898	日本名勝記	遅塚金太郎	徳島では鳴門の渦潮のみ
1898-1904	大日本名所図録	清水吉康	
1900	最新避暑案内	妹尾勇吉	
1901	山影水声避暑旅行	枕流山人	徳島の紹介はあるが伝統的名勝のみ
1901	避暑漫遊旅行案内	金尾種次郎	徳島線は載っているが伝統的名勝のみ
1902	全国漫遊最新名勝案内	津田房之助	徳島線は載っているが伝統的名勝のみ
1903	日本漫遊案内	坪谷善四郎	徳島線は載っているが伝統的名勝のみ
1906	日本漫遊名所古蹟案内		純然たる駅路の行程案内．徳島線や徳島-讃岐街道は触れられている．
1910	**西部鉄道管理局線名勝遊覧案内**	**森永規六**	
1911	避暑と温泉	野田桂華	徳島は言及されている
1912	お国自慢	大島貞吉	
1914	**徳島線名勝案内**	藤本帰一	

書名をゴチックで示したものが「阿波踊り」を取り上げている

ていえば，1900年前後に刊行された名所案内が建設されたばかりの徳島線を扱っている（徳島線は1889年に徳島－鴨島間が開通）にもかかわらず「阿波踊り」を取り上げていない点で，そこに10年ほどの時間差がある点が注意される．

IV むすびにかえて

本稿は，徳島という土地の換喩的イメージである「阿波踊り」が成立する時期・過程を検討する作業の端緒として，県内外の新聞・旅行案内書に登場する時期について報告した．作業自体十分に進んではいないが，内外いずれの文献でも明治末（1910年前後）がその画期であること，その背景の一つに鉄道敷設およびそれにともなう新しい旅行案内書の生産があること，などはほぼ間違いないと思われる．しかし，関西圏における新聞を検索する作業は未着手であり，それによって事実的認識を改める必要があるかもしれない．さらに，たとえ『江戸名所図会』などの名所図会類においては寺社の祭礼ではない行事が記述対象となっていないとしても歳時記類では近世でもそうしたもの取り上げられていることからすれば，「阿波踊り」への着目を近代における名所観の変換に直結させることはあるいは不適切であろう．今後の作業においてはこうした点での深化を図りたい．

付記：拙稿を2002年3月に金沢大学を退官される守屋以智雄先生に献呈いたします．本研究を進めるに当たり，鳴門教育大学の高橋　啓先生には阿波踊りに関する文献について，徳島県立博物館学芸員の庄武憲子先生には石井町におけるヒキコミについて御教示いただいた．記して感謝申し上げます．また本稿の要旨は2001年度中国四国歴史学地理学協議会研究大会で発表した．席上御批判下さった諸先生にお礼申し上げます．さらに阿波踊りの写真を貸与してくださった徳島市観光課，および図1・図2を描くために使用したMANDARAを作製された谷　謙二氏にもお礼申し上げます．

注

1) 現在の徳島県は1880年に設置された．しかし行論を簡便にするために，この現在の徳島県域をそのままそれ以前の時期にも投影して「徳島県」と呼んでおく．

2) 拙稿末尾の附表に掲げた町村史による．

3) 衣装や踊り方については松本（1980）に詳しい．

4) たとえば徳島市史編さん室（1993）・三好（1998）など．一方で正調の擁護を唱えながらそうした型を否定する著者もいる（松本 1980，1982）．

5) 石川（1999: 49）によれば「阿波踊り」の初見である大阪朝日新聞の1909年の記事はすでに「以前の良さが失われつつあると嘆い」ている．また1921年の徳島毎日新聞は「優美な阿波踊り」が堕落して「昔ゆかしい本行の型」を失いつつあることを憂えている（三原 1976: 83; 石川 1999: 49）．1932年には「踊りのジャズ化を排す」という記事が掲載され（石川 1999: 49），1936年には「ジャズ化した踊りを排撃して古典的な純粋の阿波踊り」を振興するため審査場で優勝杯を授与することが行われた（三原 1976: 124; 石川 1999: 59）．また，阿波踊りは自由奔放に踊るものながら「阿波人でなくては其の本領を発揮し得ない」（阿波保勝協会（1940: 62）・飯田（1951: 7）など）というような表現も正調意識の一つであろう．

6) 芸態については神河（1915:924-925）以来多くの文献で説明されているのでここでは詳述しない．「流し」とは一般家庭の子女や芸妓が三味線の腕前を披露するために町内を演奏しつつ巡回するものである．一般に「ぞめき」が夜の行事であるのに対し「流し」は衣装自慢もかねて主に昼間に行われた．しかし両者は截然と区別されるものではなく，「流し」をしている女性達に通りかかった男が加わって踊りの行列と化することも常態であったらしい（松本 1980: 62）．「俄」は，町内の辻々や各家の門先で行われた，現在のいわゆる路上パフォーマンスである．個人で物まねなどをするものもあれば，集団で仮装し舞台を架設して演ずるような大規模なものもあったという．

7) （生家が明治維新頃開業した）「徳島で尤も古い宿屋で永く続いてゐましたが毎年踊の時季になるとどの室も客が充まつてゐた」（林 1930: 126）という回想がある．もとより農村部から踊りに来ていた人々も少なくなかったかもしれないが，盆の買い物を兼ねて踊りを見物に来た人々が多数だったのではなかろうか．「阿波踊り」の観光化は明治末期

にその兆しが見え大正期に本格化する(石川 1999: 48)．踊りが低調であった1902年や1903年には人出の9割が見物人だったと報道されている（石川 1999:44）．1907年には盆中雨天が続いたため「出直し盆踊り」が出願され許された．その際に，出願理由として他府県からの見物客の存在が挙げられたという（石川 1999:45）．また審査場（競演場・桟敷）は1929年に初めて設置され，戦後も第2回目の1947年にはすでに復活している（石川 1999:58, 66)．阿波踊りの本来の姿を取り戻すべく1953年には一度廃止されたが，審査場がないと力を入れて踊る場所がないという踊り手側の不満によって1955年に復活した（石川 1999:67）．

8) 1970年以降（現在では徳島市の阿波踊り会館において）有名連が交代で毎日阿波踊りを演じているのを見ることができる．これは，観光化の結果 として本来の姿から逸脱したものと見なすことができよう．しかし県内外の行事に際して阿波踊りが演ぜられるのは，単純に観光化の結果と考えらるべきか，あるいは以下に述べるような歴史的事情の延長で把握するべきか，簡単には結論できないと思われる．なお，現在観光行事として阿波踊りを開催しているのは，徳島市・鳴門市・鴨島町・貞光町・池田町の5市町である（阿波おどりネットのHP(http://www.awaodori.net/)による．後掲図1参照）．

9) 表1は石川（1999）・三原（1976）によって作製した．ただし，ともに県内発行新聞を主たる史料にしているにもかかわらず両者の記述には矛盾する部分もある．表1では基本的に石川(1999)に拠り，それが触れていない年次についてのみ三原（1976）を参照した．なお，三好（1980: 226）の表は典拠が明示されていないが三原（1976）によって作製したものと思われる．

10) 宴会一般の終局に「阿波踊り」を踊ることは阿波踊りに関する幾つかの文献で指摘されている(例えば阿波保勝協会（1940: 62～63））ものの，管見の限りで民俗誌でこれを確認することはできない．しかし婚礼にも「阿波踊り」が登場するという（松本 1980:44）．以下で見るように，これは県内の市町村史類である程度確認することができる．

11) 記念行事に付随しての催行がいつから行われていたのか筆者には明らかではないが，三原（1976:12）によれば，1884年撫養町（現鳴門市）で，凶賊逮捕のために殉職した警官の顕彰碑建立式に際して「阿波踊り」が行われている．その一方，徳島の市制施行(1889年)や市制10周年に際して「阿波踊り」が行われた様子はない．

12) さらに，「阿波踊り」の禁止されていた戦時中には，前線慰問（石川 1999: 60）ばかりでなく徳島の病院でも傷兵慰問のための「阿波踊り」が行われた（三原 1976: 133-134）．これが権力の側の強制であるのか，それに借口した庶民の側の抵抗であるか，軽々には断じがたい．

13) 煩を避けるために次の婚礼関係のものも含めて利用した文献を附表として本稿末尾に付けた．盆踊りも婚礼も旧市町村あるいは聚落単位で慣行が異なる場合がある．にもかかわらず，利用した資料の性質上，図2では現市町村単位で最も早くに「阿波踊り」が始まった時期を示している．旧市町村史類についてより精密な調査を行うことは今後の課題としたい．また，町村史には時代を明示せずに「近時」などと欠かれている場合が少なくない．これらは文脈によって適宜判断した．なお，三原（1976）には徳島市だけでなく郡部における盆踊りについての記事も収録されている．しかしこれらの盆踊りのどこまでが「阿波踊り」であるのか不明のため参考に留めた．ちなみに1883年の普通新聞には「益々盛になるのみか，次第に郷村に波及したものと見へ」とある（石川 1999:40）．

14) 岡田（1977: 188）は「「ひきこみ」は，阿波の北方は盛大であるが，南方は少なく，特に農村で行う家は稀である」としている．なお松本（1980: 44）は，ヒキコミのみならず「祝宴の大円段」でも，「全員総立ちの盆踊り，新郎新婦の前で深酔いに倒れるまで踊り回る．めでたい婚礼に盆踊り，忌まわしい仏祭り踊りも許される慣習である」として披露宴でも「阿波踊り」が踊られているように記しているが，点検した市町村史類にはこの点を明記しているものはなかった．

15) また1901年の記事も，結局は現時点での踊りを批判してはいるものの，冒頭で，「盆踊は全く徳島の名物で」「風儀を紊乱せないものならば随分優美な習慣で仏蘭西の花祭に匹敵」すると述べている

（三原 1976: 41）のは単なる修辞上の技巧ではないのではなかろうか.

16) ただし，朝日新聞が確実に全国紙化したであろう戦後でも阿波踊りが報道されている頻度は高くない．すなわち同紙の『記事総覧』で調べた限りで，1945年～1975年の盆期間における阿波踊り報道は1960年・1962年・1973年・1975年しか行われていない（他に1952年には各地の盆踊りの記事があるが，記事自体について調べていないため阿波踊りを取り上げているか否かは不明）．もっとも『明治ニュース事典　第4巻』（毎日コミュニケーションズ）によれば1892年の盆踊り中止の記事が東京日々新聞に出ているようであるから，関心の東西差を云々するためには東京朝日新聞以外の関東のメディアをも確認する必要はある.

文献

阿波保勝協会（1940）『阿波案内』阿波保勝協会.

飯田義資（1951）『阿波の名勝』徳島新聞社出版部.

石川文彦（1999）新聞に見る阿波踊り　明治から昭和まで．阿波踊り研究 6: 34～67.

石毛賢之助 1916.『阿波名勝案内』石毛賢之助.

浮田典良・伏見能成 1999. 新旧ガイドブックを通じてみた河内の「名所」．歴史地理学 193: 23-34.

岡田一郎 1977. 牟岐町の婚姻習俗．阿波学会編『総合学術調査報告　牟岐町　郷土研究発表会紀要第23号』185-190. 徳島県立図書館.

神河庚蔵（1915）『阿波国最近文明史料』神河庚蔵.

五井　信 2000a. 鉄道・＜日本＞・描写－花袋の紀行文『草枕』を巡って. 二松学舎大学論集 43: 53-75.

五井　信 2000b. 表象される日本－雑誌『太陽』の「地理」欄1895-1899. 金子明雄・高橋　修・吉田司雄編『ディスクールの帝国－明治三〇年代の文化研究』240-272. 新曜社.

真貝宣光 1997. 大正初期阿波踊りの名称登場　青島陥落の祝賀行事に．阿波踊り研究 5: 34-35.

竹内啓一 1993.『とぼろうぐ－地理学雑記帖』古今書院.

徳島県教育委員会文化財課編 1999.『「徳島の盆踊り（阿波踊り）」歴史資料目録』徳島県教育委員会文化財課.

徳島市史編さん室 1993. 阿波おどり．徳島市史編さん室編『徳島市史　第4巻　教育編・文化編』784-799. 徳島市教育委員会.

林　鼓浪 1930. 阿波踊漫談. 阿波郷土誌 1: 125-128.

松本　進 1980.『阿波踊り』徳島市観光協会.

松本　進 1982. 阿波踊りの歴史. 石躍胤央・高橋　啓編『徳島の研究　第7巻民俗編』1-45. 清文堂出版.

三原宏文 1976.『阿波おどり実記』三原武雄（宏文）.

三好昭一郎 1980. 徳島藩と阿波おどり．徳島新聞社編『阿波おどり』167-242. 徳島新聞社.

三好昭一郎 1998. 徳島城下の盆踊り．三好昭一郎『阿波踊史研究』16-36. 徳島県教育印刷.

附表　「阿波踊り」を取り上げている市町村史類

市町村名	文献名
徳島市	澤口政次郎ほか編著 1935.『八万村史』 森本安市 1953.『渭東風土記』
鳴門市	（著者無記名） 2000.『地域誌　木津神のすがた』鳴門市木津神地区継承文化保存委員会
小松島市	勝浦郡役所編 1923.『勝浦郡志』
阿南市	1925.『富岡町誌』 西方村誌編集委員会 1983.『西方村誌』
勝浦町	『勝浦町史』
上勝町	徳島県勝浦郡上勝町誌編纂委員会編 1979.『上勝町誌』
佐那河内村	佐那河内村史編集委員会編 1967.『佐那河内村史』
石井町	石井町史編纂会 1991.『石井町史下巻』
神山町	鬼籠野村誌編集委員会 1995.『鬼籠野村誌』 岡田一郎 1976. 神山町周辺の婚姻習俗『総合学術調査報告　神山町　郷土研究発表会紀要第22号』
那賀川町	
羽ノ浦町	
鷲敷町	徳島県那賀郡鷲敷町町史編纂委員会編 1981.『鷲敷町史』
相生町	澤田順子 2001. 相生町の婚姻について『総合学術調査報告　相生町　郷土研究発表会紀要第47号』
上那賀町	
木沢村	木沢村教育委員会編 1988.『木沢村の民俗』
木頭村	（著者無記名） 1961.『木頭村誌』徳島県那賀郡木頭村
由岐町	由岐町史編纂委員会 1985・1994『由岐町史　上巻・下巻』
日和佐町	日和佐町史編纂委員会編 1984.『日和佐町史』
牟岐町	牟岐町史編集委員会編 1976.『牟岐町史』 岡田一郎 1977. 牟岐町の婚姻習俗『総合学術調査報告　牟岐町　郷土研究発表会紀要　第23号』
海南町	（徳島県海部郡海南町誌編集委員会） 1966.『海南町史』
海部町	
宍喰町	宍喰町教育委員会編 1986.『宍喰町誌　下巻』
松茂町	徳島県板野郡松茂町誌編纂委員会 1976.『松茂町史＜下巻＞』
北島町	北島町史編纂委員会 1975.『北島町史』
藍住町	藍住町史編集委員会編 1965.『藍住町史』
板野町	板野町史編集委員会編 1972.『板野町史』
上板町	上板町史編纂委員会編 1983.『上板町史』
吉野町	吉野町史編纂委員会編 1978.『吉野町史』

市町村名	文献名
土成町	徳島県板野郡土成町史編纂委員会 1975. 『土成町史　下巻』
市場町	市場町史編集委員会 1996. 『市場町史（町制40周年記念出版）』 岡田一郎 1979. 市場町の婚姻習俗『総合学術調査報告　市場町　郷土研究発表会紀要　第25号』 近藤有地蔵 1916. 『大典記念　市場町史』
阿波町	林町誌編集委員会 1955. 『林町誌』 阿波町史編集委員会編 1979. 『阿波町史』
鴨島町	（著者無記名） 1964. 『鴨島町誌』徳島県麻植郡鴨島町鴨島町教育委員会
川島町	川島町史編集委員会編 1982. 『川島町史』 岡田一郎 1971. 川島町の婚姻習俗について『総合学術調査報告　麻植パイロット開拓地帯郷土研究発表会紀要　第17号』
山川町	山川町史刊行会 1959. 『山川町史』 山川町史編集委員会 1987. 『改訂　山川町史』
美郷村	美郷村史編纂委員会編 1969. 『美郷村史』
脇町	脇町誌編集委員会 1961. 『脇町誌』 棚橋久美子編 2001. 『阿波国上田美寿日記』
美馬町	美馬町史編集委員会編 1989. 『美馬町史』
半田町	半田町誌出版委員会 1981. 『半田町誌　下巻　経済・文化・民俗』
貞光町	貞光町史編纂委員会編 1965. 『貞光町史』 岡田正義 2001. 阿波踊りの思い出. 上柿源内・松浦義人『阿波貞光町の息吹』
一宇村	一宇村史編纂委員会編 1972. 『一宇村史』
穴吹町	穴吹町誌編さん委員会編 1987. 『穴吹町誌』
木屋平村	木屋平村史編集委員会編 1995. 『改訂　木屋平村史』
三野町	
三好町	三好町史編集委員会 1996. 『三好町史　地域史民俗編』
池田町	岡田一郎 1980. 池田町の婚姻習俗『総合学術調査報告　池田町　郷土研究発表会紀要　第26号』 池田町史編纂委員会編 1983. 『池田町史　下巻』
山城町	近藤辰郎 1960. 『山城谷村史』 岡田一郎 1978. 山城町の婚姻習俗『総合学術調査報告　山城町　郷土研究発表会紀要　第24号』
井川町	西井治夫 1982. 『井川町史』 澤田順子 2001. 井川町の婚姻儀礼『総合学術調査報告　井川町　郷土研究発表会紀要　第44号』
三加茂町	三加茂町史編集委員会 1973. 『三加茂町史』
東祖谷山村	徳島県三好郡東祖谷山村誌編集委員会編 1978. 『東祖谷山村誌』
西祖谷山村	喜多重昌・片山頼政・前川嘉吉編 1959. 『西祖谷山村史』
三好郡	三好郡役所編 1924. 『三好郡志』

市町村名	文献名
美馬郡	笠井藍水 1957. 『新編美馬郡郷土誌』

記載を簡潔にするため，発行者は原則として省いた．

郡誌はいずれも復刻版を利用したが，原板の出版年のみを示した．